3－6　1854年の東海地震の震度分布について

萩　原　尊　礼

武者金吉著「日本地震史料」に基づいて，1854年の東海地震の震度分布図を作ってみた。この地震は，安政元年11月4日（1854年12月23日）9時頃に起り，東海，東山，南海の諸道が大いに震い，特に震害が大きかったのは，伊豆西北端から駿河の海岸に沿い，天竜川の河口に達する延長約120㎞の東海道沿いの地帯であったが，伊勢国津，松坂，甲斐国甲府，信濃国松本，松代などでも多くの潰家を生じた。地震による津波は，房総半島沿岸から土佐湾まで及んだが，特に伊豆国下田，志摩国および熊野浦沿岸の被害が大きかった。震災地を通じて倒潰および流失家屋約8,300，焼失家屋600，圧死約300，流死約300となっている。

この地震から32時間経った11月5日17時頃，南海地震が起り，五畿七道にわたり地大いに震い，土佐，阿波の両国および紀伊国南西部は特に被害が大きかった。津波は房総半島の沿岸から九州東岸に及び，特に紀伊の西岸および土佐湾，大阪湾などの被害が大きかった。震災地を通じ倒潰家屋10,000，焼失6,000，流失家屋15,000，死者3,000となっている。

従って，ある地域では東海地震に引き続いて南海地震の震害を受けたことになる。このような地域では，被害を記録するのに，どちらの地震でどれだけの損害を生じたというように，明瞭に区別していないものがかなりある。今回は史料を一つ一つ読んで，明かに東海地震によると明記されているものだけを取り出して震度を定めた。当時の記録であるから，決して震度決定に便利なようには書かれていない。従って図に示した震度は筆者がそれと判定したものであって多少の主観が入ったことは逸れないであろうが，大過ないものと思っている。

この震度分布図を作った目的は，将来このような地震が起った場合の被害想定に役立てることのほかに，この地震の震央あるいは地震域をはっきりさせたいためであった。図に示した震央の位置とマグニチュードは，理科年表に記載されているものを参考のため掲げたものである。震度分布から見ると，地震域の中心は，図に示した震央よりもう少し東へ寄っているように見える。史料には，御前崎に近い相良町付近で土地が約1ｍ隆起したことがはっきり記載されている（相良史）から，御前崎がいわゆる地震域に含まれていることは確かである。

なお，理科年表に「富士川洪水を起す」と記されているが，これは富士川上流の白鳥山が崩壊して川を堰き止め，後にそれが潰壊して下流に氾濫したものである。

1854年　東海地震　震度分布図